

Jリーグにおける外国籍選手の変遷と傾向に関する研究

A study of changes and trends on foreign players ~Case of J.League~

1K09B175 福永 淳史

主査 平田竹男 先生

副査 中村好男 先生

【背景】

1993年にJリーグが開幕してから今年で20年の節目を迎えたが、数多くの外国籍選手が活躍してきた。外国選手について、1993年から2011年までの間には1142件の選手登録があり、選手数は約2倍になった。Jリーグで7年間プレイし続けたストイコビッチ氏は「知名度のある選手たちが果たした役割は大きく、各クラブだけでなくリーグ全体の宣伝に大きく貢献した」と述べている。

外国籍選手の登録枠については、開幕から2009年までは各クラブ3名以内となっていた。しかし、同年にAFC加盟国選手の選手登録枠（アジア枠）が設けられ、従来の3名枠に加えてアジア枠の選手を1名まで登録および試合エントリーが可能となった。さらに、2013年新たにJリーグ提携国枠（仮称）が設けられ、従来の3名枠に加えてJリーグ提携国の国籍を有する選手を2名まで登録および試合エントリーが可能となった。これら外国籍選手枠の導入の目的はJリーグのゲームレベルの向上やアジア地域における新たな事業可能性の開拓、アジア地域との国際交流、貢献の推進である。

【目的】

これまで長期にわたって外国籍選手の変遷や傾向に関する分析はなされてこなかったため、本研究では「Jリーグにおける外国籍選手の変遷と傾向を明らかにすること」を目的とした。

【方法】

J. LEAGUE YEAR BOOK2012(Jリーグ公式記録集2012)を用いて、1993年から2011年の間に選手登録されている外国籍選手の登録件数1142件を対象とした。対象となる全選手の国籍・登録年月・抹消年月・ポジションを抽出した上で、以下4項目の分析を行った。

- ①出身国別の選手数
- ②年度別の出身国
- ③出身国別のポジション
- ④選手の契約年数

手法4では、1993年から2011年までの18年間で2つの期間にグループを分けて分析を行った。199

3年から2002年までの期間をⅠ群、2002年から2011年までの期間をⅡ群とした。

【結果】

手法1より、出身国は全部で58カ国であり、最も多くの選手を輩出している国はブラジルで483名であった。次いで、韓国が107名であった。手法2より、ブラジル選手の登録件数は過去18年間で増減を繰り返しており、韓国選手の登録件数は2007年以降急増していることが分かった。手法3より、登録選手数が多かった国は上位から順にブラジル、韓国、アルゼンチン、クロアチア、オランダ、オーストラリア、ユーゴスラビア、パラグアイ、チェコ、コロンビア、ドイツであった。また、オーストラリアを除いた国ではFWとMFの選手と契約している割合が高いということが分かった。一方、オーストラリアに関してはDFの選手と高い割合で契約しているという結果となった。手法4より、Ⅰ群(1993~2002)に分けられた選手の平均契約年数はⅡ群(2002~2011)に分けられた選手より0.28年長い結果となった。

【考察】

Jリーグに全58カ国という多くの国々から選手が流入していることから、現在のJリーグは海外の選手から見て魅力的な場であるということである。2007年以降、韓国選手の登録件数が急増した背景にはアジア枠の影響を受けているということ間違いのない。しかしながら、一方でアジア枠が設けられたにも関わらず、韓国とオーストラリアの二カ国しか入っていないという現状がある。JクラブはFWの外国籍選手と多く契約する傾向があり、DFの選手との契約は少ない傾向があるということである。この傾向には二通りの見方が出来ると考えた。1つは、クラブが多くのFWの外国籍選手と契約することが日本のFWの選手との競争を生み、技術力の向上に繋がるので良いという見方である。もう1つは、日本人選手の活躍の場を奪ってしまう可能性があるという悪い見方である。外国籍選手の契約期間は短くなっている。さらにこれは、海外からの選手は入れ替えが激しくなってきた傾向にあると言い換えることが出来る。